濱田鑑

荒井文哉著

全

187
81

藤井懷古著

續日本後紀

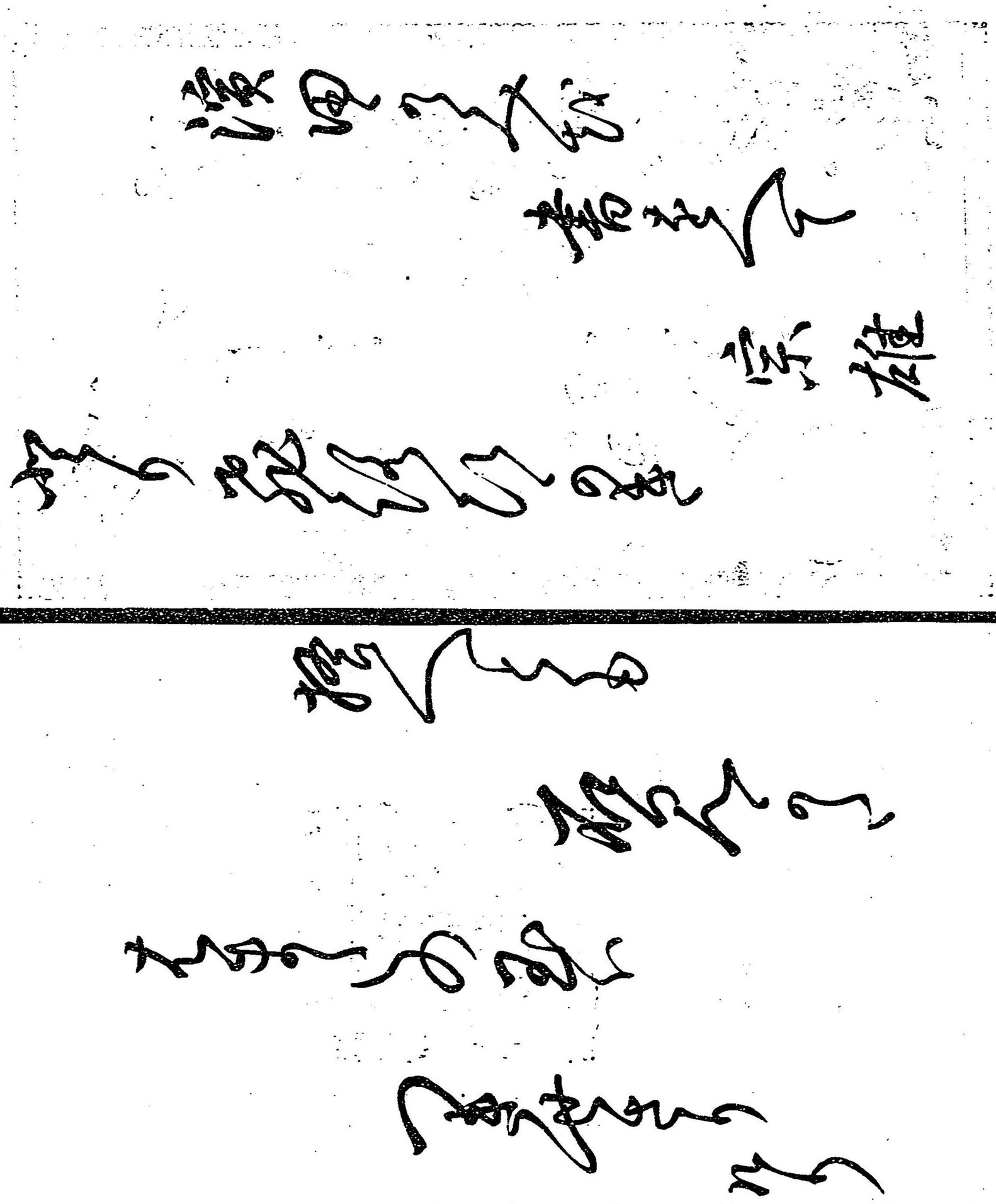
達典堂藏

安貝

玉

漢七位稿本求證史

五・明治書院



安達共榮堂藏版之章

濱田鑑

大教正　藤井宗雄編

玉拾ふ濱田町は石見國那賀郡石見郷に在り南に山を負ひ東西に小丘を連ね北は海に臨み其中間は平地にて一川を通し二港を懷く往昔は民屋僅少にて吉川元春これに據り尋で其子繁澤元氏在番して諸般を裁判せり元和五年二月大膳太夫古田重治これを領し勢州松阪より移住し鴨山を開て城閣となす此山は風土記に高一百廿丈一里十歩とあり一は神山と稱し嚴島社天滿宮荒神來福寺寶福寺龜井寺等あり麓に間島八右衛門住しを地替して他に移し軍師瀧山一學古市久馬浪人松田武太夫など繩張をし攝州より瓦

工甚太郎を抱ら淺井にて三十間四方の地を賜ふ其子孫富島氏今に存れり藝州長州より工匠を呼寄せ明年二月より土木を起し蘆より大石を引揚け十一月に至て竣功し是を龜山城と銘せらる其とき櫻木に鐘を掛て指揮し給しを鐘掛の櫻と云ふ今は無し崇石は同時に古田殿の腰を掛られし石と云ふ城閣の大概は龜山の絶頂を本丸とし周回百八十五間四方に塀を掛る中に三重の櫓あり高二丈六尺一寸下閣東西九間南北七間中閣七間四面上閣五間四面なり廷家坪二百三十三坪半出丸あり門あり二丸は周回四百七十間建家なし矢倉壁あり北方に焔硝藏あり麓に多門あり三丸は周回五百十七間建家坪千百三十三坪内に太鼓堂あり

此下に雁木大明神あり此邊を柿本朝臣の古跡と云傳ふ万葉に「鴨山の磐根し卷ける吾をかも不知て妹か待つゝ有む」とあり番所諸役所土藏あり續て御殿あり其南は御住居あり御と呼ふ古名を間島と呼へり此の後の岡に高尾の楓を移し植らる故れ紅葉山と云ふ此山に讃樹權現また地獄谷の上に姫柄社ありしか明治七年頃は共に他へ遷されたり外方は堀にて南方幅十六間北方二十一間長百三十間北方沼に續く塀を掛け矢狭間鐵炮狭間すへて四百十七を穿たる米藏は多門の北に有て湊に續く欄干あり門の數九所井の數十三所山下の周回十五町二十間と云ふ南は内片庭なり馬屋あり馬場あり此の上岡を夕日丸と云ひ吉川元春此

處に陣屋を置るゝと云ふ九間四面の矢倉ありし由なり此麓へ元和八年十月に並樹の松を植らる此の西續に御茶屋あり今の掬翠亭なり池を穿ち其中島に御茶屋を建られ小島に嚴島社を祀り上岡に稻荷社あり此の両社は維新のとき他へ移さる池水は大川に通し小船出入す續て船小屋あり飛龍丸灘吉丸千鳥丸常磐丸と云ふ四艘の城付の船ありき其尻に今は屠牛場あり濱田川は古名石川なり万葉に「今日今日と吾待つ君は石川の貝に交りて有と言すやも」「直に相は相もかねてむ石川に雲立わたれ見つゝ偲はむと見え隱德太平記に濱田石川とあり石見川の畧なるへし新敕撰ま「朝ことに石見の川のみをたえす戀しき人に相見てしかな

とあり楓川と云は由なし雲城村より流る下流舊く二流に分れ一は天滿嗅より池田を流て青より海に入る是を青川と云ふ今は無し古川の跡少か遺れり一は河原町より丸内を流れ湊より海に入る元和中に合て下山に通し淀瀬田の鯉を放ち殺生禁斷の場所とせらる昔し唐津船こゝに泊し禁斷の鯉を捕て食ふ此事を大阪にて語しより顯はれ以後唐津船は此川へ入る事を停られたり鮒多く溪鰛は少く上る川下にて牡蠣を捕り此所より松原へ掛て春は麩條魚を捕る大橋あり是より南は市街なり此處表御門なり福島家闕國の時に遭遇し普請延引して柵門となり本門の材木瓦は目錄にて御見分ゆゑと云ふ此内に馬溜あり今は共に無

し此内は大手吉原殿町中門福浦祇園町堀町河原町藪町内
片庭等の名有て周回十二町四十間なり此内を惣て丸内と
唱ふ家老年寄用人を始め諸士の屋敷なり今は地形大に改
まる先濱田病院あり其前に櫻馬場あり共に内片庭の跡な
り濱田町役場中學校小學校あり是は舊の藪町なり小學校
は明治十七年八月建築の時に松原の出店河内屋西阪彦太
郎より金千百四十余圓差出す故れ官より三組の桐御紋入
の盃を下賜せらる郡長赤間赴城その功を賞し碑文を立ら
れたり本町の公同館は近ころ建し大區役所を石見産紙會
社とし更に公同館とせり舊の馬溜なり郡役所は濱田縣廳
を以て當られたり津和野の御殿を以て建らる濱田税務署

あり監獄署あり是は舊の大手にて郡役所は岡田家の邸内
の跡なり古田殿の時に岩上へ御殿を建られ此とき御住居
上下二所ありしを岩上の舘を親族客分古田將監に賜し由
なるか岩上は今の石神にて岡田氏の邸やかて其舘の跡な
らんと想はる此の邸内に式内の石見天豐足柄姫命神社あ
り今は縣社にて郷社を兼ぬ是は穀麻に就て大麻山三宮と
同時に祀られ給ふ文政元年普請奉行宮木半次郎宗幹中島
小右衛門直則なり明治七年一月の再建は權令佐藤信寛と
石碑に在り共に上普請なり額に松平周防守藩石井友之進
利豐十一歳元祿十年四月武州淺草に於て半堂射越矢數惣
矢八千通七千八百一本石井虎之丞利重九歳同年五月千發

之内通矢九百五十五本を記す此額今無し社後の石神は概ね五千年の昔し穴門國たりし時に怪石あり迦杼田命こを八束水臣津野命に訴ふ命これを阿麻杼命久麻杼命に令て八段に割裂しめ給き故れ其地を石見と謂ふとあり其石いまも現然たり阿麻杼と濱田と音通ふ境内の龜山神社は城主古田松井本多松平の四家十八代を祀る外郭三十六坪塀あり内郭高二尺七寸横二間半竪二間玉垣あり高三尺五寸碑石高七尺五寸幅二尺八寸厚一尺九寸三重臺惣高四尺四寸碑名は表に濱田城主歴代碑と刻し裏に濱田城元和五年三月古田重治所創築也爾來易姓四歴代十八閲年二百三十有一至明治二年六月松平武聰之時廢焉蓋王政維新之由矣

今茲建碑于其趾勒城主姓名以傳不朽如左大膳大夫古田重治元和五年二月從伊勢國松坂移寛永二年十一月廿五日卒兵部少輔古田重恒繼封年月闕慶安元年六月十六日卒無嗣而家絶周防守松平康映慶安二年八月從播磨國完粟移延寶二年十二月晦日卒周防守松平康官延寶三年二月繼封享保十二年四月九日卒周防守松平康員寶永二年正月繼封正德三年廿二日卒周防守松平康豐寶永六年九月繼封享保二十年十二月二日卒周防守松平康福元文元年二月繼封寶暦九年正月移封于下總國古河中務太輔本多忠敞寶暦九年正月從下總國古河移同年七月十日卒中務太輔本多忠盈寶永九年八月繼封明和四年閏九月十六日卒中務太輔本多忠肅明和

四年十一月繼封六年十一月移封于參河國岡崎安永六年五月八日卒周防守松平康福從下總國古河移于參河國岡崎明和六年五月又封于此地寛政九年二月八日卒周防守松平康定寛政元年四月繼封文化四年三月廿二日卒周防守松平康任文化四年五月繼封天保十二年七月廿二日卒周防守松平康爵天保六年十二月繼封七年九月移封于陸奥國棚倉明治元年五月三日卒右近將監松平齊厚天保七年九月從上野國舘林移十年十一月五日卒右近將監松平武揚天保十年十二月繼封十三年十月廿八日卒右近將監松平武成天保十三年十二月繼封弘化四年九月廿日卒右近將監松平武聰弘化四年十二月繼封慶應二年七月移于美作國鶴田明治十五年二

月七日卒と記し脇に明治二十五年六月建之とあり文は宗雄選み書は廣島縣人秋田有年の筆なり建立の由來は郡長赤間赳城城主の祭祀の廢れて有を慷慨の折から此事を藤井宗雄常に歎くと告る人あり故れ赤間氏更めて宗雄に委托し荒井克原山崎寛次石津平造河上甚壽郎に令て藤井を助け有志を募り成功すべしとなり爾來明治二十一年一月發起し宗雄始終を擔當し二十五年十一月廿五日に竣功祭を修行し此日を以て例祭と定めまた神道分局長を祭主に石神社の神職岡本家を副祭主と定む夜燈は松平家の寄附なり又境内の芭蕉國井豐竹の碑は同ころ萩人中村祗歡號梅處濵田在勤中に俳諧連中と共に建らる國井は紺屋町の

鍛治職國次と云ひ豐竹は田町の上澤屋の主にて和田半六と云人なり殿町に朝鮮館と云あり昔の學校ならむ今は無し此處の石橋へ天保六年冬凡そ四五間もある大なる蛇見はる此日より七日に當り國替の飛脚來ると云中門口に馬溜あり今は無し是を出れは松原浦なり古名を岩崎と云ふ建長二年四月益田太郎兼時材木粮米を京師に送る丸茂兵衛尉兼忠濱田岩崎より進發す弘安四年五月蒙古襲來益田家臣末元兵衛兼直濱田岩崎に出張すとあり此間すでに小市街ありしなるへし今は富家商人漁士多く船四十二艘あり大敷も桂島唐島師子口とて三場所ありて春秋の魚獵に富め

り元和五年八月十一日古田殿濱田入部のとき松原の西野三浦なと市木まて御迎ひに出つ古田殿御喜悦ありて松原の地子銀を免し給ふ一說にも漁夫孫右衛門地理檢分の案内せし功ともあり地子の事は事ある時は此處陣處になる故とも云ふ孫右衛門は三浦氏にして今の岩國屋の祖なら む此浦に文化文政の頃に今津屋清助と云ふ船乘あり曾て二千四百石積の大船を造る世人これを阿房丸と呼ふ一旦難に遭ひ改易すまた無宿に八右衛門と云ふ船乘あり曾て竹島に渡り竹木を伐る此事や周防守家老岡田秋齋年寄松井圖書に關す故れ天保七年六月廿九日両人共に切腹し八月廿五日檢使吉田百助内藤三郎兵衛濱田へ下着あり八右衛門は十二月廿三日死罪母菊は過料三百文其他も裁許あ

り秋齋は初名頼母諱は元普と云ふ墓は長安院にあり圖書は諱は元辰と云ふ墓は顯正寺に在り左に折れは湊なり厩島神社あり相殿に客人神を合す舊除地二石七斗八升六合なり石見記に城山より遷すとあり今の地は潮見矢倉臺と云ふ此の西の上に少の平地あり則ち焔硝藏の下方なり是を寺地と呼ふ龜井寺の跡なり淨土宗心覺院あり此處に舊く運上場あり此奥を布子谷と云ふ昔の街道なり海邊を行けは外浦港なり舊名姥之懐と云ふ琴浦と呼ふは由なし港内十餘町に亘り屈曲して風景最も佳し大小の船舶出入す向に鑓之鼻を臨み此方に撿潮場あり昔は民家六七軒はかり有しと云ふ今は商家船問屋あり近頃まて運上場あり場

屋ありて賑ひしか今は無し陶器を産す麁なれとも廉價なり金刀比羅社あり此港の奥に續て田之尻浦あり此處に津和野侯の米藏あり今は無し此邊に瓦師多し此處より産湯多陀寺等へ通ふ小道あり昔の街道なり少の峠を越れは産湯浦なり民家少しあり古歌に「石見潟産湯の浦の宇志保爾は人をも喰もて人に食る」是は宗祇の歌と云ふ如何あらむ八幡宮あり由來に吉川元春繁澤元氏周布元兼上府八幡宮を建立せらる此とき宇浮湯小崎新右衛門と云人の先祖周布殿に奉公せし由緒を以て願ひ上府八幡宮の末社として當地へ歡請し社領高六斗附られたるか証文紛失し慶長七壬寅の撿地に打上となる然れとも府中八幡宮の末社に紛

なし其印に八月十五日の祭に五番のすまう又二十五のさいかよちやう出所實正也天保十年亥之十月吉日とあり是は引直て記す小崎新右衛門は下地を削り其上に記てあり産湯井あり和泉式部か小式部を生み此井にて洗ふ婦人この井の石をたしなめは産安しと云ふ但し和泉式部に係て云は信しかたし別に由あるへし此處の西に加牟之浦加牟之峠猪子宮髪洗水手水川鞍骨鐙波良伎牟谷なと云ふあり波良伎牟は腸切なるへし此等の地名を合て猶考ふへし此邊にも瓦師多し眞言宗龜甲山多陀寺あり濱田風土記に昔し空海の相弟子に流世と云ふ僧あり共に入唐し空海に先立て大同元年に歸朝し此處に觀世音を安置し秘密の道場とす或とき漁人海上より此山を望見るに光氣あり是を流世に告く故れ行て見に檜木より烏三羽飛降り幣帛三本降る流世心肝に銘し三社權現を歡請す今かの檜の大樹の本に在とあり舊除地四石九斗八升二合或は四石四斗内二斗二升二合權現領とあり上府八幡宮の延應二年より延慶二年迄と書寫せし大般若經の奥書に此寺にて寫たる由を記せり記主上人は此寺にて學て遂に碩學となると云ふ寺の後に熊野權現社あり大同元年の歡請と云ふ舊社領二斗二升四合とあり寺は此神社の別當なり此邊より府中を眼下に見る眺望佳し稻荷社あり舊二月初午日に近郷の男女參詣し盛なり聖廟國司の墓は寺の門前の右方にて中間と云

ふ家の後山に在り丸き小石を多く置て大化の制に應へり別に印も無く由來詳ならす聖廟と稱れは等閑の人に非す按に柿本朝臣を歌聖と云ひ龜甲山の龜と鴨と訓近し由は無か猶考ふへし俗ゝ清兵衛國司と云は執に足らす是より田之尻に立戻り山手通り布子谷ゝ歸り福浦の祇園口に入る馬溜は今は無し須賀神社あり天正十三年六月の棟札に祇園本地藥師如來大檀那源朝臣二保宮内太夫元棟當郷役井頭宗右衛門棟兵とあり一に牛頭天王とも云ふ舊稱祇園社明治三年正月須賀神社と改稱す古田侯以來御城主代々の崇敬社なり祭日舊六月七日濱田浦の大年社へ渡御し給ひ十三日還幸なり藩政の時は藩より鐵炮弓鎗等を出され

八町松原よりも屋臺とはり物を出し濱田第一の賑ひなり夜燈に松平康尊と記し額一面薩摩守忠度の圖狩野孚信門人尾崎何右衛門政信號玉遊齋の畫にて安永五年十月十五日息何右衛門政方奉納す相殿は新庄八幡宮なり新庄は當地の古名か若は安藝國新庄より遷されたるにや舊社領二石五斗四升一合なり當社地の固有の主神なるか零落に依て近く相殿とせり此處の山に愛宕社あり寛永十三年古田重恒侯の歎請にて眞言宗般若院これに奉仕せしか明治三年正月復飾し松尾昇と改め廢寺となる此奥を祇園谷と云ふ法華宗妙智寺あり慶長十六年八月創立と云ふ松平家の担寺となる右近將監松平武揚侯天保十年十月廿八日逝去

にて此寺へ葬らる大乘院殿從四位下詣山府君之墓と記す
實は七月廿八日の逝去なりしか未た嗣君の沙汰なき故に
御病氣と申事にて十月廿八日とし給と云ふ下れは祇園町
河原町なり此處を田町口と云ふ裏門あり馬溜あり今は無
し瓦師あり出れは田町なり此處に近く家を立經て新田町
と唱ふ天滿宮あり是は往昔は城山に在りしか築城の時に
松山へ遷し明治廿五年某月今の地へ再遷す此外に荒神も
城山より共に遷せし由なれと詳ならす抑も城山は風土記
に鴨山と有て鴨神社ありしならむと想へと更に知へき由
なし若は此の荒神にや猶考ふへし眞言宗寶龜山來福寺あ
り是も元和中城山より移と云ふ此山を松山と云ふ近く好

事の者これを鏡山と呼ひ隨て淨瑠璃曲の尾上岩藤の事を
附會し此山に其墓ありなと云れと無根の事なり麓に天台
宗護摩堂あり俗ゝ五万燈と呼ふ天正中安國寺一揆の時に
燒失す元和中城山の焔硝藏の下方に在し天台宗龜井寺を
この護摩堂の處へ移されし由なるか今は無し知足庵は河
上家の持佛堂なるへし高良谷に住吉の杜あり濱田浦の住
吉神社は享保中に此處より遷されたりと云ふ櫨山に瓦師
あり迫浴に靜窟社ありまた連理と云處に連理の松あり鄕
中は元和後の開墾と云ふ處々に沼あり方今は射的場とな
る工事中なり淺井神社あり祭神大己貴神嚴島神なり元和
八年大阪住南都藤原朝臣富島吉右衛門家次の再建なり此

人は甚太郎と云人と同人か考ふへし吉右衛門の次に金田六兵衛と云あり金田と改して見へて五六代繼き安永文化の頃に富島六兵衛峯穹同六三郎森昌とあり復姓せしなるへし末社に古田靈神あり万治三年に祀れるならむ古斐橋あり古斐は地名にて肥とも記り鯉橋と心得は宜からす先鋒峠あり文政の頃此處に定八と云者あり田町の諸色屋某を殺し金を奪ふ顯はれて刑せられたり立還れは横川町にて續て田町なり法華宗龍泉寺あり寛永四年三月僧日仁創立本願河上氏とあり寛永を文祿とも記り寺中に淨池院殿清正公大神儀を祀る舊六月二十三日祭にて參詣人多し此處の河上家は家名を沖と云ひ代々庄屋また割元を勤む往

昔は城山の麓に間島八右衛門とて住しを元和築城の時に替地せられしとも或は慶長三年十二月繁澤治郎兵衛より孫左衛門に護摩堂にて替地を賜ふとも云ふ當家は河上安藝守祐直の一族河上寶壽丸より十七代八右衛門正時を中興とす夫より當主甚壽郎正良まで十三代なり十一代甚右衛門正房は領主御勝手差支に因て金借入のため和田の槇之坪跡市の澤津等と共に上阪し大阪詰勘定奉行生田小膳と談合し銀主方へ賴入たるに銀主は下地貸金の返濟滯ありしを立用して用立たり於是て表面は大金なれとも內實は僅少にて御用辨とならす此とき生田より河上へ對し數日の滯阪若干の入費その所詮も無しとの事なり此の生田

氏の兄は國秀とて天下に知れたる大學者なり事故ありて越後にて終らるまた男辰之助は十二歳の時に十三經を讀竟て御褒美を賜ふ學者にて詩を善くす山本半彌も學識あり益田にて討死す小出粲も學識あり東京にて屈指の歌人なり此一族いかなれは此く勝れるや河上は其の無功を耻て旅宿へ下り京都三條通り茶屋久兵衛方にて切腹す實に弘化三年十月廿三日なり亨年四十三法諱實乘院索領日法居士墓は護摩堂山の先塋の次に葬む昔し應仁二年京師の亂に石見は山名持豐に屬し船にて上る但馬國蛇島にて難風に遭ひ船覆り生者僅に三人なり其内の一人は當家なりと云川端に出れは石津家の製糸場あり其隣りに殿清水あ

り舊領主の御用水にて諸人の汲を禁せられし川に沿て神明町あり古名琵琶首と云ふ神明宮ます相殿に新清元麻呂を祀る新清は松平隼人康紀の五男なり國學に達し和歌を善くす石見名所松葉集を著す元文四年十一月十三日卒る墓は長安院にあり此上の山を万燈山と云ふ一名兜山なり冠山とも云ふ浅井豐前守の城跡と云へり川に沿ふて上れは石見村なり浅井長澤黒川原井の四村を合せて此村名置く小學校あり石見村役場あり此上の丘を道同山と云ふ下に道同淵あり上れは黒川なり黒石川の畧なるへし此邊を中芝と云ふ此處の酒屋は當主を宇津寅市と云ふ代々庄屋家なり方今酒造盛大にて國中第一の醸造高と云ふ續て石

水製糸場あり此處に第五師團歩兵第廿一聯隊の兵營を置る明治三十一年七月廿四日轉隊せり衛戍病院あり北に練兵場あり此邊に小岡あり由布倍碁毛理と呼ふ名跡と云ふ由來詳ならず案に弓部子杜の義ならむか延暦廿一年九月石見入弓部鎧主を安房國に流すと類聚國史にあり此等に由は無か猶考ふへし此奥を高佐と云ふ國府左の義なるへし鬼山あり昔し賊の籠りし地ならむ後野の正連寺城山の跡見も此川を渡れは三宮あり祭神大祭天石門彦命神社と式にあり相殿に諏訪神を祀る縣社なり舊社領三十六石三斗六升一合なり大祭舊十二月廿五日なり當月朔日より御領分中海に山に漁獵して供ふる古式ありまた櫻の名所と

云ふ今は僅ょあり此上の山を三子山と呼ふ岡本美作守の城跡と云ふ川に沿て上れは河内なり此邊に水車多し坊河内と云家あり此處に神護院と云か有しと云ふ三宮の別當ならむ向に岡本家あり岡本美作守の裔にて代々三宮の神職なり昔し美作守に女あり小少將と云ふ後に大形殿と云ふ容顔勝れたり細川讃岐守持高に合て細川掃部頭直之を生り天文廿一年八月十九日持高自害し後に三好豐前守義賢入道實休の妻となり彦次郎長治孫六郎布保を生と西國太平記に見たり辛谷と云は御林の柳木山に對したる大なる坂なり元治二年に經塚新右衛門の碑を建つ此處の道路に有功し人と云近頃廣島へ通ふ二等道路の結搆あり立戻

れは社家地八幡宮あり舊社領十七石五斗四升三合なり祭日舊八月十六日ゟて鏑銃馬あり社家は尾崎氏にて寛文八年三月下府より移ると云ふ此處の後山より近く異樣の陶器を堀出る古墓なるへし此奥を今井迫と云ふ昔し今井某住し故に斯云と云へり桃多丶下れは阪本と云家あり宇津氏にて代々庄屋また割元を勤む其下に禪宗善福寺あり岡本美作守の菩提寺にて明暦元年二月郷中より今の餓鬼山に移す施主竹本三郎四郎法名念譽源阿深四居士とあり下横路と云ふ處に勘兵衛於連の墓あり亨和中牛市の河内屋勘左衛門妻於れむ遊客勘兵衛と不義ありて逃去る勘左衛門追行て邑智郡市木の三坂にて二人を害す其首塚と云ふ

南方を竹迫と云ふ天台宗神正寺あり本尊藥師如來寶暦九年僧建山創立す或は社家地八幡宮の神殿に有し木像を申し受しと云ふ次に杉道なり周防守殿の家中に岡本茂八と云人あり右近將監殿へ引付となり代官手代を勤め銀二貫目はかり引負となり出走して萩に在しを杉道の秤屋貫兵衛と云者行て連歸る庄屋中この銀を償はむと願へとも聞屈られす遂に天保八年某月斬罪となる此後貫兵衛夜行のときは茂八の姿を視ことありと云ふ其子は氣病を煩ひ出刃鉋丁にて自殺す茲にまた右近將監殿の藩に下重支龍と云ふ醫師あり其妾は京都の人にて變動の後この杉道に住めり子なし一の人形を求め松王と名付け朝夕も常人にす

る如く膳を居へ夜も小用に連て起き近所へ行ても速く歸らねは松王か待と云て急き歸れり一奇人と云へし是より三重に出つ北方は川に沿て新道あり新橋あり朝日町一丁目朝日町二丁目と號く二丁目の裏は牛市町なり田町へ渡る橋あり以前は土橋なり秋葉社あり近く三重より遷す祭神三尺坊なり相殿四座は稲荷社寛永十六年古田兵部少輔伏見より歡請す嚴島社同年同氏の歡請なり讃樹樹現祭神詳ならす正德中の歡請なり雁木大明神祭神詳ならす此神の坐し處を御城地目錄に柳本人丸逝去の地と云ふ今に塚ありと記し名所記も同趣にて大鞆堂の下とあり是は古き言傳の有しなるへし以上四社は城山に有しを明治維新の

時に同社へ合併せらる此外に姫柄社を蛭子町の天滿宮の末社とし市中の稲荷社九十余座を夫々合併せられたり懸兵屯所農事試驗場等あり三重橋を渡れは昔の濱田市街の東の入口にて番所ありき此川は野原今井迫より流るゝ小川なり壬生忠峰家集に「石見かた三重の河なみ立かへりみつには如何て山吹の花とあり山吹蛙の名所と云ふ清水あり此處の天台宗三重山觀音院は寛永十六年より御祈願所とせらる明治二年十二月復飾して宮木春と改名し秋葉社は牛市へ移し寺は廢せられたり境内に銀杏樹あり以前實を結へり故れ子供ら石を投て之を取とて人を疵付け或は屋根の瓦を損ふ於是て伐木せむとす其夜住僧の夢に吾は銀

杏樹なり伐こと勿れ明年より實を結はしと云ふ僧は不思議に思ひ伐ことを止たるか然るに明治七年の頃此樹を切たるに何事も無し命數の盡しにや三重を右に折て紺屋町あり此裏の川端に古田殿の時に馬場ありしと云今は田と成れり天台宗明星院あり大日如來を安置す所願所なるへし由來詳ならす此町に藩士中川顯允と云人あり文政三年十月石見外記を著す茲に享保十年九月十七日此町より火出て青口まて燒延ひ宮一所社二所寺九所山伏二軒藩中町屋千三百九十一竈職名十八軒燒失す是を紺屋町火事と云ふ此南の町は新道路にて三重町と號く左に折て今宮社あり是い若宮に坐しを近く此處の庚申堂へ遷せり古き書類

に若宮とあり舊地も若宮と呼ふ正德の頃より今宮と記り文龜二年三月の歎請なるへし長保長曆の歎請とするは信しかたし舊社領三石三斗五合慶長三年十一月玉泉庵堅城に打渡さる今の神職は岡本氏なり山手は若宮町なり舊名一町田古名は天滿縄手と云ふ但小石橋村と云は若は小石川村の混ならむ此邊は濱田村と覺もれはなり此處の岡に要害の跡あり濱田風土記に三重城平井伊賀守とある是か大永三年尼子經久は其將牛尾遠江守幸清川副美作守常重馬田與左衛門湯信濃守惟宗等三千余騎を率て濱田に入り瀬戸細越に對し陣す二陣若林伯耆守千五百騎にて續く大内義興は陶尾張守同安房守青景越後守仁保右衛門太夫等

を率て盛山に陣す豐後國大友義敦の將糸長彈正忠小原伊豫守等三千人を率て合力す濱田天滿啜の合戰より大内方五千餘にて打出て仁保左太夫天野源八を始め百二十余人討死す尼子方牛尾藤三郎馬田小十郎天野五郎兵衛卯山權助小山又七を始め三百七八十人討死す若林伯耆守頸三十余討取る其後五十餘日對陣し和睦して相分る明治座は明治二十九年に建つ此とき誰か詠けむ「明治座か出來て濱田の勢ひは二倍三倍芝居成けり」と詠り神道分局は明治八年に神道各宗共合して中教院を建つ十一年神道一手となり其後に神道分局と改稱し令に依り宮中神殿遙拜所とする た島根縣第二神職取締所を合す此奥を若宮と云ふ導火製

造所あり明治三十一年二月十九日出火て即死一人片庭の河野國太妻古與恠我人一人蛭子町川上坂三郎なり此處の山にて狐の啼とき火に祟ると云ふ神南備山天滿宮あり山名は近く付たるものなり昔しは眞言宗の僧あり石像の地藏を天神と祀ると濱田風土記にあり今も代宮屋を天神堂と呼ふ祭日舊六月廿五日なり賑ひあり神職は江木氏なり今は無し末社姫柄社は祭神姫靈松平周防守殿の時歡請と云傳ふ由來詳ならす世俗より妾を非業に殺せし祟にて國腹は育たすと云ふ寛政十年八月濱田殿の妾自害す若は是かまた古田殿懷姙の婦を殺されしと云ふ是は無根なるへし此社は城山に有しを明治六年ころ此處に遷されたり次

は蛭子町なり衣美須神社あり八町より祀ると云ふ今は天滿宮の境内へ遷す此町に東屋吉次郎と云人あり曾て此神を信仰す一夜夢に馬に騎て入來たまひ其馬を大黑柱に繫き給ひしと見たり故れ神棚に祀りたり是より家運ひらけ男五一郎まて二代身代も善くなれり然るに近頃に其の叔母云く眞宗に神を祭るは宜からすと云ふ於是て神棚を取除きたるか是より漸次に不始合に成り近頃家も賣て他町へ移れりと云、此町に基督教會あり天理教會あり淨土宗長安院は寶永六年二月松平周防守康員創立開山鷲譽和尚とあり此處に以前惠堅寺ありしを折戸へ移し其跡へ建られしと云ふ境内の墓は松平康映延寶二年十二月晦日逝去雲

峰院殿照譽淨閑大居士と稱す松平康官享保十二年四月九日逝去恭嶺院殿相譽寂道至閑大居士と稱す松平康豐享保二十年十二月二日逝去成德院愍譽興仁遊和大居士と稱たこの三墓は後に京都黑谷の長安院へ改葬せられし由なり松平康員正德三年三月廿二日逝去恭嚴院殿安譽知性春道大居士と稱す松平康福寛政元年二月八日逝去自通院殿愛譽冲寂妙關大居士と稱す松平康定文化四年三月廿二日逝去清崇院殿順譽德風大居士と稱す松平康任天保十二年七月廿二日逝去寛祐院殿讓譽温良惟德大居士と稱す松平康爵明治元年五月三日逝去寛隆院殿温譽誠園德潤大居士と稱すこの五墓は江戸の西久保の天德寺に在り故れ

當寺に在る招魂墓なるへし右は御世代なり此外に松平康
載先祖墓二十二霊と記せるもあり御一族御家中の諸の墓
も數多あり何頃にかありけむ和尚夜更て歸るとき幽かに
聲あり尋みれは新葬の墓なり故れ穿ちぬれは不思儀に蘇
生す是は藩士の息女なり錫ユ尼とせしと云ふ倶樂部あり
明治二十年ころに建つ此處も墓所の跡なり其上に時打堂
あり此の山續に久光山八幡宮あり棟札に奉建立神殿一宇
大檀那藤原朝臣元春本願森脇次郎右衛門尉中間七郎右衛
門尉大正二年甲戌年八月吉辰大工東方源左衛門尉とあり
舊社領三石七斗五升八合或は六石ともあり寛永中野原よ
り遷せり大祭舊八月十五日なり城主代々崇敬の社にて鉄

砲弓鎗を出され八町よりも屋臺その外に賑を出し神幸畢
て鏑銃馬あり馬は領主より一疋町より一疋出て門辻町槍
物屋町を馳る末社手置帆負命彦狹知命神社なり相殿若宮
醫祖神金工神なり次の末社田神社なり祭日舊十二月十三
日なり田淵柏屋青の表屋橋本屋、上、柳之沓の藤十給爲之巢
野原の大休仲野屋平野屋榧木掘越なと講中ありて毎年順
番に自宅にて祭る是を加牟能米祭と云ふ神嘗祭の義なら
む又この社を加牟能宮と呼ふ此外に伊勢両宮熊野社稲荷
社等あり山下に社人平野氏の宅あり是は寛永中野原甚右
衛門を神職とせられし由し已面白にあり前は眞光町なり
古名新道町と云ふ禪宗寶珠院あり明暦四年正月三日開山

明室祖鑑とあり正月三日は祖鑑の忌日ならむ境内に古田重恒殿の墓あり慶安元年六月十六日江戸にて逝去なり休岩寺殿關雄宗三大居士と記す惠堅寺のありし長安院の處より移せしならむ禪宗洞泉寺は延文五年十二月晦日開山石門源義とあり此月日は源義の忌日なるへし境内に吉川元春女の墓あり周信源園大童子二月十二日卒と記し年詳ならす岡本治部少輔の娘吉川氏の妾となり一女を生む四歳の時より疱瘡にて死す吉川氏より金錢六文茶湯料として寄附せらる此の金錢の代り田地三石寄附と云ふ但舊除地一石二斗とあり此處の後を上山と云ふ稻荷社あり八幡宮の末社なり此邊貧民多し此西に禪宗吉祥寺の跡あり此隣

に製糸場あり此邊を近く清水町と號く眞宗眞光寺あり天文元年賢也創立とあり上府村覺永寺の隱居を移すと彼寺にて云傳ふ是も天文中の開基あれは少か違ふに似たり何か由あらむ淨土宗廣雲寺は町に其跡あり今の俠氏の別莊の邊なり此邊大概墓地なり廣雲は或は廣運ともあり又今の眞光寺の處より廣雲寺あり廣雲寺の處に眞光寺ありしを地替せし由城地目錄にあり西に禪宗觀音寺あり慶長十六年八月十四日惠文和尚創立とあり境内に秋葉社を祀る是に並て眞宗顯正寺あり慶安三年三月參河國額田郡赤阪正法寺第六世了歸の二男了寂創立とあり境内に河合氏の墓あり夢想天流棒師川合八五郎德隣之墓安政四年二月二十

日と記す御船手役にて兵法に達し彫刻を能せし人なり號を片トと云ふ句を嗜めり此町に蘆屋齊藤多吉と云人の母の娘の時に其母誡めて云く女子は少食にすへしと云り娘は是より飯を二椀と定て過食せす而て藩中へ嫁し二子を生み後家と成て郷に歸る常に柿を好む毎も其半分をとり皮を去り箸を付て食ふ豐飯の時には先に柿を食たりとて飯を減す斯て老年に及ふも健康にて一度も煩し事なし九十余にて經行をみる二度なり遂に百二歳にて天年を終る實に術生の鑑とや云へし茲にまた中川豐元と云人あり豐前小倉の町人にて尺八を好み虛無僧と成て他行す脊高く色白く人品骨柄よし偶ま濱田より來り岡田氏の別莊にて尺

八を吹き遂ゝ此地に足を留め虛無僧の頭とせらる又他行し舊識の賴に依り敵討の助太刀をす其は近江國膳所の城主本多下總守殿の藩中に平井西司と云人あり早く卒て其長男市郎治跡を繼て近習を勤む二男策治は他家を繼き三男九市郎は弱年にて家に在り茲に市郎治は文政六年八月廿日に研屋辰藏と害せらる行年三十二なり武士として町人に害せらる不覺なりとて九市郎は暇を賜ふ故に敵を討むと他行す策治も暇を願ひ外記と改名し共に濱田に來り中川氏の方に二十日はかり寄宿し助太刀を賴み三人打連て他行す敵辰藏は讃岐國阿野郡羽床下村の農與太郎の忰にて與之助と云ふ性惡にて家を出て京都に行き研師を習

ひ研屋辰藏と改名し平井氏へ出入す一日夕かた市郎治は沐浴して凉み居し處へ辰藏來り珍しき刀出たり御覽下されとて差出す市郎治は取て見いかにも珍しと暫し見て納むとす辰藏は私仕舞申へしと受取て隙を伺ひ切掛て二刀に討果し出奔す遺恨は詳ならす或は女方に就てとも云ふ如何あらむ右三人は濱田を發て讃岐國に行き高松在ゴて探り得て平井兄弟は表より入て名乘掛て切結ふ辰藏は叶はすして裏より逃く中川豐元は兼て斯あらむと薮蔭に忍ひ在し か顯出て尺八を以て薙くる兄弟追來て討留たり直に丸龜へ屆け聞糺し濟て本國に歸り兄外記を新知百石賜ひ弟九市郎は本復せしと云ふ中川は再ひ濱田に歸る晩に

故ありて役を罷られ骨董を業とす明治元年五月十七日に終る行年七十三德照院明峰玄徹居士と謚る墓は觀音寺に在り男謙造醫を業とし此町の常盤屋に住す此邊より原町へ掛て古名を吹上と云ふ今も沙漠あり此後を池田と云ふ古川の跡あり享保十七年の秋凶作明年の春夏大飢饉なり此處へ御粥小屋を立られたり蓼原は賊仕置の場所なり就中弘化四年邑智郡上田所村の里世と云女その夫を害し此處にて磔に行はる眞光寺の門前より三階村舊名細谷へ通ふ小路あり少し登れは清水あり天保の末ならむ寶福寺の小僧に自觀と云あり二本松にて女を害し自は此非に投て死す右方の岡ゴ老松あり二本松と云ふ一名を笠松と呼ふ

相傳て古田殿入國のとき市木の御阪より持來て植られし
と云ふ坂を登りきれは野原なり此邊ゟ京松田舍松と云あ
り京の山伏と田舍の山伏と切合て死し塚と云ふ昔し山伏
か四十八人爭て亡しと近村處々に言傳あり是と同時の事
にて宗教に係り爭しにや垢離掛堂あり清水出しか壬申の
地震より乏しく成れり是より三階山なり三峯あり日月星
の三神を祀る風土記に三光峯と記き俗には坂山と呼ふ三
階の字音なるへし此の山脈に雲來山橋立なと云あり万葉
ゟ橋立の雲來云云と詠しと同義にて神代に神等の天上に
通坐し御階と察はる夫木集に「渡るとも盡くへくもなし君
か代の三階の山の動きなけれはと有て名所と云ふ此山は

細谷に属り寛保二年三月八日竪七町横三町燒ると云西北
に下れは柳之沓なり桃を産す花盛には濵田より見物の人
多く遊ふ栗栖山は一名を鷲巣山と云ふ永祿中小原主水立
籠る吉川元春その將赤川七郎左衛門に人數を添て差向る
赤川は盜賊と悔り瀧山と云ふ難所より押寄せ大勢を討る
力責にては兵を損すへしと火を掛たるに烈風にて拒む能
はす主水は腹掻切て死す殘兵も同枕ゟ死し赤川も矢疵を
蒙る其とき燒し米灰と化て今も出と云ふ赤川を八重葎に
は藝州坂村の人にて坂新五左衛門とあり小原は盜賊には
非らす此邊を知行せし鄉士にて事故ありて茲に及しなら
む此山の麓に屋形之谷と云あり向平と云處に小原主水を

祀ると云ふ下れは小石川なり石川に對て此名あり嘉吉の頃此邊を小石川村と云ふ此邊すへて能登守信兼の領にて其一族川村石見權守兼雄小石見の城に居りし由なれと此城いま詳ならす住吉社あり夫木集に慈鎭和尚「石川の塚の昔を尋ねしをあはれと思へ住吉の神とあり塚の昔しとは榊木朝臣の塚を尋られし由なり此歌より名所とし新清元麻呂の歌その兄松翁の詩なとあり天保中長磯に浪人あり鼈を捕て鬻く漁人ら其を惡みて追立つ其妻姙身なり此社に入て産む然るに不日に境内潰て社轉倒たり此の上山を大陣平と云ふ元龜元年五月周布將監晴氏の舍弟三神本左衛門太夫則重三隅悪五郎國定ら濱田石川に陣し敗すとあ

り此とき此處に本陣を据けむ是より一等道路に出つ長州路なり此處より燒物を産す海手の岡を阿古野と云ふ榎あり此樹に毎年虫生す常盤虫と云ふ一名を女郎虫と呼ふ其形ち女の頭に似たり糸を生し繋れ垂下て死す土俗相傳ふ昔女郎あり船人と契り出船のとき後を慕ひ此處に來り縊て死す其靈の虫と化りと云ふ此下を長磯と云ふ貝類多し炮台あり嘉永中異船防禦の爲に築かる今の不老園の地これなり不老園は海浴場にて明治廿四年ころに建つ風景佳く夏は浴客多し此邊を瀬戸見町と號く古く古田町と云し事あり山手に穢多の住居所あり穢多は穢名茶筌なと呼ひ盜賊を捕ふるを職とし竹細工を業とす正月四日に萬歳樂

を舞て毎家を廻ることあり牢屋も此内にありしか今は無し非人の小屋あり小屋者と呼ふ罪人の死骸を取扱ふ明治五年に共に平民に列せらる茲に石神あり高七尺七寸周二丈八尺自然の岩なり小社あり祭神詳ならす以前再建のとき此岩震動せしと云ふ此地を立石と云ひまた青と云も此岩に依て起し名なり青とは青石の略にて黒石川を黒川と呼ひ青石川を青川と呼にて察すへし此處濱田の西の入口にて青口と云ふ以前は番所を置れたり入れは原町なり右手の岡に浄土宗專稱寺あり貞譽一魯創立とあり庭前の躑躅の盛りには見客多し此門下に清水あり續て毘沙門社あり左手に浄土宗十念寺あり念譽聲道創立とあり境内の八

幡宮は久光山の殿内に在し佛体を申受しと云ふ次に浄土宗專向院と云か有しか今は無し右手に眞宗四方山光西寺あり天文四年僧惠誓創立とあり左手に浄土宗安樂寺あり原町の北に辻町あり禪宗西蔵寺あり舊除地一段歩寛永二十年五月僧明室創立とあり永祿中吉川元春また繁澤元氏の役所此處にありしと云ふ浄土宗稱名院あり村田家に石像の大黒神を安置す高一尺周二尺五寸五分下に長久三壬午三月と彫す古雅にて石質鐵の如し此家は古田殿入國のとき鍛冶職を勤め鍛冶の頭となり大鍛冶屋と云代々浦大年寄にて舊家なり寛永六年二月の大火享保十年九月の大火文化七年十月の大火明治五年二月の大地震の時も當家

は怠なく逃れしは此神の在す故にや北は大元町なり舊名を折戸と云ふ禪宗天長山地久寺あり萬治元年三月全雄和尚創立とあり此の年月は和尚の忌日ならむ舊除地九斗五升寛永十四年三月古田侯より高十石寄附せらる正保三年六月廿八日江戸に於て古田家の家老古田左京年寄加藤治兵衛黒田作兵衛ら逆意す近習富島五郎左衛門が忠により露顯す御老中月番阿部豐後守殿へ訴へ成敗すべき旨の仰を得て左京治郎兵衛は御前に於て富島五郎左衛門平岩數馬藤本作太夫に討果さる黒田作兵衛日比傳右衛門勝喜内今中玄覺は欠落し御評定所に出て古田殿の惡事を申立つ松平伊豆守殿は富島を呼出され其申立を尤に思召され右四人を兵部殿に下され左京が嫡子左馬之助二男萬吉三男長吉を始め都合十八人地久寺にて仕置せらる太刀取兒玉七郎兵衛なり加藤勘左衛門同嫡子市兵衛加藤齋三郎同弟某園岡次右衛門同嫡子忠四郎同二男市之亟都合七人は樣子を聞て船より逃け播州室津にて切腹す墓あり此とき忠四郎勇あり富島は知行二百石の處七百石に平岩は二百五十石の處五百石に藤本は二百石の處四百石となる富島兄弟三人も加增あり地久寺の西に大元神社あり棟札に小野村高田山大元大明神元文元年九月祝宦江木宮内少輔とあり此邊は古名濵田村にて小野之市場は有しか小野村の稱なし況んや元文の頃に於てをや祭神國魂神大國主神少彦

名神とあり大元神は大御食神なること別に考へあり舊除地一石三斗八升六合とあり祭日舊十月中亥日なり社の下に神職江木氏の宅あり其西に禪宗瑞雲山惠顯寺の跡あり顯の字は或は賢堅なとあり古田家の菩提寺にて長安院の地に在しを此處へ移されしなり今は無し茲の上の岡に氣象臺あり測候所と呼ふ明治廿八年頃より置る折戸の南を濱田浦と云ふ下小路上小路小中江なとの字あり漁戸の數百八十九戸男女九百四十五口船大小百六十二艘あり此外に原井七十五艘淺井三十艘町二十八艘あり大敷は瀬戸口宇那田伊勢の三場所あり專ら魚漁を業とし春は若魚伊加祁夏は鰺鯖海鰕棘鰭秋は鰍冬は海鰻を捕る此外枚擧に遑あ

らず就中く鯛小鯛を名産とし舊く献上せられき明治七年六月五日量目六貫目の大鳥賊を獲る同十二日長八尺の龍魚を捕る男井女井と云あり舊十月中亥日の夜に折戸の大元社の社人來り此水を汲て神酒を釀る此とき行逢し人は不吉ありと云傳ふ又舊十二月廿三日三宮の社人來り神酒一升洗米二升持參す浦よりは豆腐の汲物にて酒を出し鰭付七十五鮑螺螺二十五を渡し之を廿五日の御贄の鱠として奉る又舊八月十六日社家地の例祭に此浦より鰭付七十五鮑螺螺二十五を持參し十五日に村田家より矢根を上る等の古式あり扨又税關あり濱船問屋あり此浦の西の限りを島崎と云ふ舊は番所を置る運上場ありしか今は無し寶

永六年二月廿六日此浦より火出て杉道まて延燒す是を濱田浦火事と云ふまた文化七年十月火出て工町まて燒失す大元神社あり神龜二年六月勸請と云寛仁四年中納言當方郷の勸請と云ひ濱田風土記に村田家の先祖とまた村上天皇を當浦の氏神と祀ると云共に信かたし節分に村田家より米酒茶炭蠟燭魚を差上け新町中村家より小豆酒を差上來れり遷宮の時は村田家の主人御羽車の左に付添て手を掛て行こと先例なり例祭舊九月十三日なりまた舊正月十三日に祭あり是は天明八年二月十三日當浦の漁人獵に出たるに十四日俄然に時化となり隱岐出雲等へ吹流されたり辛くして歸りし船二十八艘なり行方知れさる船五艘

との乘組十一人なり此旨を大年寄村田善三郎より屆出たるに浦奉行後藤助左衛門奥書をして神職河野千島へ渡されれ文化十二年二月十九日大風波にて漁船難に遭ふ是また其書へ奉行田中傳兵衛奥書して神職河野監物へ渡さる毎年正月十三日に休業し浦人當社へ集り神事竟て此二通を讀聞する例なり神職河野氏の家は社の右脇に有しか今は寶福寺の側へ移り跡は魚せり場となる住吉神社は島崎の岬に在り享保中淺井村の高良谷より遷せし由河上家の書類に在り松平康定侯崇敬にて寛政二年六月に造替へられたり祭日舊六月晦日なり此日茅輪を潛る式あり又牛馬を率て海まて洗ふ此處より熱田長濱大麻等を望み風景佳し

鶴島は濱田浦より二町はかり沖にあり老松一本あり昔し隱岐國知夫の船人材木を積て瀨戸に泊し鶴と云女と契る女云く假初に馴染て三年に及ひ今はたゝならぬ身となれり隱岐へ連給へと云男云ふ此度は上方に登り下りには必ず誘引せむと云て出船す女は何思ひけむ其船を目掛て游き此島に來て死す其骸を埋め標に松を植る故れ鶴島と云と傳ふ淨土宗極樂寺は開山貞譽一魯和尙とあり舊除地五石あり古田殿入國のとき御宿陣となる寛永五年十一月二十日燒失す寺中に將軍秀忠公石碑あり寛永九年壬申正月廿四日台德院殿一品大相國公尊儀奉古田兵部少輔重恒造立之とありて碑石高六尺とあり此の碑石いゑ見へす世評

に寺の床下に有と云また同銘の位牌もある由にて高三尺とありまた渡邊次郎兵衛の墓あり氏は同防守殿の家來にて馬は大坪流鎗は五之坪の素鎗兵法は神道流の上手にて知行三百石なり事故ありて慶安二年十二月十日御殿に於て討る行年三十八なり討手は小泉九右衛門堀增岡右衛門松山文左衛門津阪源之亟なり堀增の子両人渡邊と改て相繼し渡邊與右衛門同十兵衛と云しか遂に斷絶す近來墓より脇指出たりと云ふ此寺に並て眞言宗鶴島山寶福寺あり大同元年眞空上人開基中興日旦那嘉吉三年能登守信兼とあり信兼は三隅家にて井野村に住し石見郷を領す故に井村石見守と稱せし人なり舊除地七石なり此寺に嘉吉文安よ

り文明に至り書寫せし大般若經あり當寺は城山より移せし由なるか恐くは誤傳なるへし其は先年探索せしに少も証すへき物なく且右の右般若經の奥書に云云文明十年戊戌正月日敬白石陽那賀郡小石見郷濱田村鶴島山寶福寺常什とあり城山の邊を濱田村と云も覺束なく殊に彼處にて鶴島山と書へき由なけれはなり濱田風土記ゟ昔し異船との地に來り七体の石像の唐佛を揚置とあり其處詳ならす近來當寺の山より夢想に依り石佛を數多掘出せり由は無か粟島神社あり嘉吉文安中の勸請と云ふ寶福寺の本尊は藥師と云藥師堂の額あり由ありけなり祭日舊三月三日なり市中の子供ら割籠を持て參り遊ふ此北に檜浦あり永祿五年福屋民部少輔隆兼親子濱田の細越に落ち尋て出雲に落つ德田刑部少輔かねて諫れとも用ひす茲に於て走來り泣て從ふ濱田風土記には檜浦より小船に乘り雲州へ赴とあり此の北の岡を高尾山と云ふ海邊に和布干場とて岩あり此上に嘉永中に炮臺を築かる北に燈明松あり其北に石見物産會社の場所を築く方今尚は工事中なり此向は瀬戸島なり名義は昔し此處にて瀬戸物を燒しより云と云へり狹門の義にても有へし細越と云も此島ならむ大永三年の合戰に遠矢を射しのみにて瀬渡細越は落すとあり今も中岡は要害ありし跡ありまた南の岡に維新ころまて大炮を置れたり此島は小島の三はかり集合て一の島と成れる物

の如し周防守殿の時に寶暦中ゟ中岡と北岡との間に浪除を築れたり其の以前は時化の時は此處を浪越て二島の形を成せり東西五十間南北四町四十間とあり其懐に漁家あり戸數舊くは三十二軒とあり今は六十五戸男女三百二十五口船四十七艘あり專ら魚獵を業とす學校あり船問屋あり舊くは番所を置れ運上場ありき前は港内にて上下の大船輻輳す風景最佳し近時久我殿の巡回の時に當港を小西湖と稱されしと云ふ海士屋と云家二軒あり表屋隱居と云共に小林氏なり此の表屋御用の熨斗を買入に九州へ行ときは帶刀を許され鳥毛の鎗印を立て行けり嚴島神社あり正平九年十一月五島より遷すとあり貞治六年天正十一年

に神田の事見へたり祭日舊六月十八日なり近時より神輿を港中を渡し奉る近郷の男女參籠多し文化十年正月廿一日安藝國嚴島より鹿來る大雪ゐ二月廿八日まて留め熱田村の福井濱まて送歸す是より先に鹿來り煩し故籠ゟ乘せて嚴島へ連行しこと宮島名所圖繪に見へたり其後も度々來れり毎も花染を胴に卷て返す例なり文政天保の頃に此島にて捕鯨せられ六疋はかり捕獲ありたれと不引合にて間なく止となりたり矢筈島は瀬戸の西にあり東西一町二十間南北三町とあり民屋なし近ころ開て畑とし嚴島神の小祠を建つ小竹多し故に矢筈島と云ふ万葉の小竹島とするは非なり此島に大なる蛇すめり時として見ること有

と云ふ馬島は瀬戸の西北に在り東西二町一間南北五町三十九間どあり新町の三澤家の所有もゝに三澤島と呼ひ古く馬を牧し故に馬島と云ふ畑あり漁戸二軒あり嚴島神社あり三澤家より祭る明治三十年この島に燈臺を置る伊勢島は馬島の西にあり草木なし昔し長濱の漁人この島にて神鏡を見當り持歸りて祀る是れ彼村の神明宮なり是より伊勢島と云ふ伊勢雄潟と云ひ名所とするは由なし立返りて瀬戸口を北に出れは松原浦外浦の口を見る此間の海岸を万年鼻と云ふ嶮崢の巖の聳たる岸にて魔所と云ひ人の懼るゝ處なり舊名ハ十三年之岬と云しを十三年目に人の死る事あり故れ周防守殿の時に万年鼻と改められたり昔

し周防守殿の藩中に安達又三郎と云人あり江戸の品川にて釣を垂し時に一人の男も同く釣を垂れ卽て腰より瓢を出て自ら呑み其盃を安達へ指て一つ召給へと云ふ安達は辱なしと引受て呑み此盃は如何と問ふ男答て是は髑髏の盃なりと云ふ又云く吾宅は通筋なり歸に立寄り給へと約て別る安達は夕刻まて釣て歸るとき彼の男かり立寄たるに誰も出て來す暫して下女膳を据たり安達も空腹なる儘に食たれと替りも持來らすすくすくと吾家に歸りたるなり是は霜月三日なりとそ母に斯と告たるゝ母大に驚き其は亡者なるへし以後かならす釣に行こと勿れと固く誡むは是より釣を止しか數年經て濱田に歸り素より好なる釣な

れは竿を擔て出て行しかは十三年岬にて海に落て死たり其日も霜月三日なりしと云寶暦四年四月晦日十三年岬の燈明岬にて笹野順悅と其下女と情死す下女の死骸は陸に在り青口にて二日肆さる順悅は十日はかりして瀨戸の邊て骸を得る此後も万年鼻にて人も死し怪事も度々あり安政五年三月四日藤井屋嘉三郎と云人下山にて惣身鼠色の毛を生し口は耳まて切れ角生たる者覆面したるを見ると已面白にあり此處を入れは動木なり陶器製造所あり續て川下なり濱田川の尻なり此處にも下山工場とて陶器を產す此上の岡を下山と云ふ惠布利ともあり稻荷神社あり享保十四年伏見より勸請とあり其西南の麓に避病院あり沼多し此邊を總て原井田と云ふ耕地なり或とき田淵へ侍來り原井田へ狐縮を掛たる由其筋ゟて不宜と噂ありたりと云て去る田淵の主人は直に詮議をし行て見れは狐一疋破衣を着け麻からを大小として指し其絹に掛て有しと云ふ此邊いまも狐多し川に沿て上れは水主町なり舊くは沖田屋長屋鷹部屋なと云町ありき番所を置れ運上場ありしか今は無し但し今も三百石以下の商船此處まて登り來りて荷物を揚下して賑ふ故れ近く貸席を建たり昔七月十六日に精靈送とて此川へ流し今夜は萬燈とて麥藁船を造り無數の燈火を點して流す川の上下に充滿して見事なり盆踊とて十四日より月中男女入交りて市中を諷ひ踊りて歩行

しか維新の頃に共に停止られたり此處に井あり以前堀る時に馬骨人骨の交りて出しと云是は大永三年の合戰の時に埋めし物ならむ上世人肉を食せし証なと云は非言なり此鷹部屋に松平家の藩士野中多右衛門と云あり極て貧なり一日同藩士木内源七來る此人は蜀山人の弟子にて狂歌に長せり多右衛門物語の中に貧なるを語る源七曰く其は拙者祝し直さむとて「此家を七福神か取り卷てと詠たる時に多右衛門は頭を叩きて嗟難有と云ふ源七下を繼て「貧乏神の出所も無しと詠めり多右衛門は此奴と云樣に源七の脊を打ち互に笑て別れしと云ふ南に植町あり田淵と云家あり山崎氏にして代々原井村の庄屋なり此前に高等小學

校あり明治十八年に建つ是は龍勝院の跡なり禪宗龍勝院は慶長十五年九月僧机岳創建とあり舊除地一段一畝歩なり今は無し新道に稲荷社あり西に笹屋町あり中原井は今なし天台宗釋迦堂あり山下と云處に清水あり茲に周防守殿の時に原井組三十三村の代官所ありき享和の頃肥村茂兵衛と云ふ代官あり近習を勤し時御前にて青菜を一雜器喰たり殿曰く汝我武者なり此鯛を食なれは吾れ箸を着す遣さむと曰ふ茂兵衛は畏まり難有く頂戴仕らむと云て二貫目余の大鯛を骨も鰭も殘さず喰れしと云ふ其子に剛藏とて十歳のころ劍術に達せしあり事故ありて浪人し其後行方を知らす此西は高田町なり舊名を本原井と云ふ此邊

は惣て士屋敷なりき裁判所あり明治十二三年頃に建つ其西に禪宗玉林寺あり貞治三年九月僧平田氏慈的創立とあり舊除地一石六斗なり境内に繁澤千代之墓あり天正十九年五月五日大華院殿地岳源厚大童子とあり繁澤元氏の子と云ふ天明中荆山和尚あり雲長石の能書と云ふ此上の岡を高田山と呼ふ「啼や啼け高田の山の郭公」この五月雨に聲を惜みを此歌に據て名所とするは覺束なし其は此の地名は本國はかりに五所あり殊に此歌は本歌ありて高間山ともあれはなり是より南に出れは京町なり舊名は今小路門之辻檜物屋町と云ひ惣て工町と云しを明治三十一年に改稱すこの門之辻の邊を古く小野之市場と云ひ檜物屋町の

廣小路の邊を桑原と呼て共に少の市店ありしと云安永七年十月十九日工町より出火して蛭子町まて二百二十一軒燒失す是を工町火事と云ふ明治二年十二月檜物屋町吉三母知佐百二歳なり三人扶持を賜ふ次に東は榮町なり是は新道路にて新に設し名なり郵便電信局あり通運會社あり東に飯田町あり此町に梅津政太郎と云人あり性直朴にして愚なるか如く清貧にて畫を能くす號を玉洲と云ふ不幸にして明治三十年十月八日死す享年四十五釋行蓮信士と謚る墓は眞光寺にあり中島と云に出れは片庭町なり太子堂あり稱德太子を祀る楓川敎校は眞宗の學校にて明治八年ころに建つ東は新町なり昔は士屋敷また庚申堂なと有

しを除きて寛文二年二月に新町とせらる此町に慶應の頃まて銀札場あり今の勉精堂の處なり松平康豐侯の時の享保十五年十二月に銀札一匁は丁錢八十文の通用なり是より以前は詳ならす本多忠肅侯の時の明和四年に銀札出る六十三文五歩の通用なり銀札加印の町は松屋助五郎常磐屋文三郎なり此両家いまは詳ならす眞光町に常盤屋と云あり由はなきか松屋と云は彼是ありて分りかたし松平康福侯の時の明和七年七月銀札一匁の通用丁錢七十二文なり明年辛卯の製札は五匁赤色なり一匁青色なり五分三分二分は白色なり都合五種なり加印の町人は八百屋次郎兵衛紀伊國屋小三郎木屋幾右衛門なり八百屋は三澤氏にて新町にあり紀伊國屋は江川氏にて田町にあり今は零落せり木屋は平田氏にして松原にあり此銀札のちに百八文の通用とせられ正銀札の印を加へられたり天保七年正月より御國替ゝ就て大に下落す後ゝ一匁を丁錢十六文に引替らる但諸上納は素の如く百八文にて納む松平齊厚侯の時の天保八年の製札は五匁三匁一匁三分二分にて共に赤色なり後に一分を加らる町人の加印なく銀札濱田會所と記し大坂改印と云ふ印を据られたり一匁の通用百八文なり此とき金一両の相場は銀六十五匁替にて銀札は二歩入なれは金一両を六十六匁三分にて替る定なり後に御勝手差支ゝて銀札下落す故れ同樣の新札を製し之ゝ增印を加て改

められたり此とき誰か詠けん「また赤にまちん喰せて殺すのかと詠り明治四年四月の取調へ慶應元年まて出來銀札高三千四百四十六貫四十六匁五分六厘と云ふ濱田銀行あり五十三國立銀行支店あり警察署あり則天堂醫院あり活版所あり此町は八百屋中村屋和泉屋袋屋とて代々大年寄の家あり其外に豪商も多く今は濱田第一の盛なる町なり但し和泉屋袋屋は零落し他へ移り其血統僅に遺れり中村屋は中村氏にて舊家なり行儀堅固の家にて諺に中村屋に奉公するか鵲不蹈に登るかと云へり昔し客來の席にて下女放屁す主人云く汝立なかれと云て客の退去まて居置れぬ下女大に赤面し井に投て亡しと云此事を或は袋屋とも云ふ三登屋上部武兵衛譚は信興とて町目代を勤めらる文化の頃高橋金左衛門と云ふ年寄役の許にて酒を給ける高橋氏大盃を持出て汝これにて給よ肴は何にても遣すへしとなり武兵衛性下戸なり云く辱なし既に御羽織も頂戴せり此上は春飯米に米の一俵も賜らは呑むと云てなみなみと受て呑干さる即て四斗俵は賜りたるを袴羽織を着なから指下駄をはきて負ひ歸りしと云文化十四年八月二十日享年五十七にて死す墓は觀音寺に在り其子六助は大年寄を勤め嘉永六年九月十四日終る墓は同寺に在り此家今は無し神田周平と云人あり尺八を好み手裏劍に達し隷書を能す本姓吉田氏にて松原の人なり江戸の神田に住し神田

と改む濱田に歸り柄巻を業とす朴直清貧にして阿諛を好
まず嘉永六年六月十七日死す享年七十六德翁道林居士と
謚る墓は洞泉寺に在り其子有一天保五年八月十四日土手
の上にて女を害し即て自殺す女は薄手にて助かる此家今
は無し此町の北に大橋あり周防守殿の時より美濃郡下吉田
村庄屋藤井傳五右衛門と云人力量あり或年の年頭のとき
此大橋を行く折から御馬放れて馳來る傳五右衛門は上下
を着なから馬の前足を掬み指上たるを別當來て引歸れり
此の褒美として米三俵賜しと云此橋の上なる櫻は大水の
時に綱を引亘す料に植られしと云川に沿て下る町を錦町
と云舊名も土手なり新橋あり此町に舊藩士高橋初次と云

人あり荒木流の柔術師福井市郎右衛門の高弟にて濱田縣
の時に巡査を勤む尋て巡査兼柔術刀術訓導を勤め明治二
十三年二月辭職し三十年九月年六十にて京都の武德會に
出て數人と試合せしに皆な勝を得たり茲に於て證狀を賜
ふ曰く大日本武德會武術証狀一荒木流柔術高橋初次氏六
十年右第三回武德會演武衆中ニ就キテ其術ノ精錬ナルヲ
證ス明治三十年十月七日總裁大勳位功二級彰仁親王とあ
り武德會より盃を賜り京都府の知事より鐵扇を拜領せり
以上濱田町の概畧なり政績は大化以前と安濃郡に國造あ
り稻置直なと諸郡に散在したれとも今知るへき由なし大
化元年に國府いまの下府に國司を置れ那賀の郡領の住し

那家は都野津邊ならむ此時は濱田は田舍なり源右府の惣追捕使より守護地頭を置る守護は余り見へす地頭は毎郡に一人を置れしか次々に一方地頭と云もの出來て國府の廳に交代して政を掌れり戰國のとき勢に乘て領地を廣めたり三隅周布福屋の如き是なり其下に鄉士あり各の土地を知行し平日は農たり事ある日は兵器を携へて從事す濱田は嘉吉の頃三隅の一族井村能登守信兼の領なり岡本大藏太輔三浦平藏なとの士あり永祿中吉川元春これに據り尋て繁澤元氏こゝに在番すと雖も一國の大勢を掌るのみならむ關之原合戰の後慶長五年八月大久保重兵衛銀山に下着して成敗す此とき那賀那に井口害右衛門昌成佃田助左衛門吉時を濱田に置る同七壬寅年石州御繩打改あり其時の役人川井小右衛門片岡勘四郎なり是を寅之御繩と云ふ一に十九年とあるは誤ならむ元和五年二月大膳太夫古田重治の領と成る之を濱田城主の初代とす此とき奉行星合助左衛門安信和田吉太夫吉次諸事を支配す元和五年に濱田領を七組に分られ名稱なる元和九年二代兵部少輔古田重恒家督す此の両代に濱田大に開け市街の形を成せり正保三年六月家老古田左京逆意の騷動あり慶安元年六月十六日古田兵部少輔殿逝去せらる嗣子なく且つ正保中黑田日比勝今中等殿の惡事を書上しに依て斷絶す七月上使目附村越七郎左衛門森治郎兵衛佐々權兵衛濱田に下向し

城を備後國三次淺野因幡守長治津和野龜井能登守茲政に引渡し在番を仰付られ両家の家臣入込み古田家の諸士は裏門より引退かる古田の家族は龜井の家老多胡久右衛門に引渡さる慶安三年八月三代周防守松平康映濱田に封られ阿部對馬守阿部豐後守より城引渡の書付渡る周防守殿の家來渡邊次郎兵衛都筑助太夫松井彌右衛門松井次郎太夫大塚助之進鈴木重郎左衛門梅津與三兵衛城受取として濱田に入る十二月渡邊治郎兵衛の騒動あり延寶三年二月四代周防守松平康官繼封せらる寶永二年正月五代周防守松平康員繼封せられ同六年二月濱田浦火事あり長安院を建らる同年九月六代周防守松平康豐繼封せらる享保十年

九月紺屋町火事あり同十七年秋凶作明年飢饉なり公儀より米二千七百石濱田浦へ廻さる元文元年二月七代周防守松平康福繼封せらる寶暦九年正月八代中務太輔本多忠敞濱田に封せらる同年八月九代中務太輔本多忠盈繼封せらる明和四年十二月十代中務太輔本多忠肅繼封せらる同六年五月十一代周防守松平康福再ひ濱田に封せらる安永七年十月工町火事あり十一月廿一日家老岡田氏の宅燒失す寛政元年四月十二代周防守松平康定繼封せらる文化四年五月十三代周防守松平康任繼封せらる同六年春濱田浦火事あり天保六年十二月十四代周防守松平康爵繼封せられ尋て國替となる是は松平康任侯御老中のとき但馬國出石

の家老仙石某の逆意に關てなりと云同七年松原の八右衛門の事あり秋凶作なり天保七年九月十五代右近將監松平齊厚濱田に封せらる同十年十二月十六代右近將監松平武揚繼封せられ同十三年十二月十七代右近將監松平武成繼封せらる弘化四年十二月十八代右近將監松平武聰繼封せらる元治元年秋長州征伐始り因州勢三隅へ出張し十二月陣拂あり慶應二年五月再ひ長州征伐あり此とき福山勢阿部主計頭邑智郡粕淵村へ出張し後に此處より逝去せらる家老内藤覺右衛門千六百五十七人を率て益田に出張す紀州勢は安藤飛彈守三隅に出張し雲州勢因州勢は濱田に出張し軍目附長谷川久三郎は津和野へ出張し後は長州へ捕

はる同三枝刑部は益田へ出張し討死す同諏訪小源太同久世三右衛門は濱田へ出張す濱田勢は一番手片岡彈正松倉丹後益田へ出張し六月十六日合戰岸靜江山本半彌川島倉次長井金三郎討死す但し和田常雄山本を介錯し松倉丹後川島を介錯す遂に益田陷る七月二日片岡彈正切腹す本多舍人松倉丹後大麻山に出張し同月十三日陷る長州の兵入る此とき大に震動し其音數十の大炮を發るか如しまた社坊の鳴動いまも倒れんと欲するか如し故に兵士一時下山す然るに社坊の僧俗これを知らすと云同日内村戰爭民家二十軒燒失す十六日十七日止戰この時に松平右近將監殿は病氣なり故れ十八日城を火て領地美作國

鶴田に退かる此とき御城御住居を始め丸内は燒け其他の
士屋敷は殘らす明屋となる茲に本明村の木挽源平と云者
の悴好松十三歳なり慶應二年六月中旬に行方を失ふ日を
經て濱田の三重にて見當り連歸て子細を問ふ好松云く老
人來て吾に負れよ好き所を見せむと云其背に乘たれは京
都へ行き空より見て通り次に高野へ行き次に長州に行き
猿の多く遊を見る老人數多居並て物語の中に濱田は救ひ
助たけれと不信心にて力に及はすと云へり益田に歸る今
度の合戰は濱田不信心なる故ゑ負くへし去年堀の松を倒
して知せたれと覺らすと云へり濱田に歸るに海も陸も一
面の火なり老人云く如此くなる故に迚も不叶と云り斯て

三重にて別れしと語れり是は其村庄屋千代延市右衛門の
直話しなり又この變動より十年はかり以前に濱田の藩士
某疋見を巡回の途中にて老人に遭遇し物語の中ゑ老人云
く來る丙寅の年に藝國より兵端を發き濱城一變すと語れ
り某は不思議に思ひ此事を紙魚住所と云ふ懷錄に記し置
しか丙寅の六月土用干に此書を見て如何あらむと思ふ間
に果して此通なりしと云ふまた六月廿三日夜流星未申よ
り丑寅に飛ふ太さ斗の如く鳴動せりまた此間旗雲西より
東ゑ行く因に記す當月二十六日夜作州小坂の民戌亥より
辰巳に武將の空中を飛行するを見る鮮かなること白晝に
見るか如し其圖に二十余歳の惣髮なるか鎧を着て虎尾の

太刀を佩き脊に釆を指し手に旗を持て空中を行く狀なり

慶應二年七月十九日長州の南園隊長佐々木男成大隊瀧彌太郎濵田へ入る是より濵田領銀山料とも長州の支配となる此とき市中の賤民とも我慢を極め不言の所業をなす延て八月十八日西原井組の内十七村一揆を起し黒人に於て四人討取られ手負三人あり此の發黨太兵衛千五郎熊次直次十月三日斬罪に處せらる明治二年五月長藩より佐藤寛作を濵田に置る秋凶作これを已凶荒と云ふ十月長州人濵田を引拂となり權知事眞木直人大森に下着し後に濵田に移らる是より先に當年二月隱岐縣を置れ八月これを廢し大森縣を置れたり明治三年正月濵田縣を置れ大森を支廳

とせらる正月十三日前田誠一浮浪の徒を誘ひ濵田の居民を煽動し一揆を起す官員は一端江津まて引き再ひ討返さる賊魁前田誠一戮せられ外三人即死す十二月佐藤信寛を知事とせらる前名を寛作と云ふ五年二月六日申刻に大地震あり此とき管内の損害は田畑荒所千三百九十七町九反五畝十歩潰家四千五百八十八軒半潰家八千三百六十五軒燒失家二百十四軒郷藏并に土藏三十二棟死人四百九十八人怪我人七百五十五人死牛馬百十三疋同怪我七十五疋堤防七千四百十五所道路橋梁五千三百四十四所山崩五千八十八所を屆出る此外に美濃郡より道路橋梁堤防田畑岸の損所千十五所と屆出るこの地震の大なるを察すへし濵田

は新町より火出て四十軒はかり燒失せ田町は殘りなく火焔となり神社は外浦の金刀比羅社海中へ倒れしか神体は岩上ゟ屹立して在し寺院は光西寺觀音寺洞泉寺寶福寺地久寺玉林寺等倒れ縣廳諸役所を始め市中端々の小家まて殘少に轉倒たり就中て哀れなるは新町の長橋屋藤助と云は夫婦に子二人ありしか殘らす燒亡せ道具屋庄次郎は夫婦に子供下女と六人なりしか庄次郎一人助り殘五人燒亡たり石見屋幸助と云ふ旅籠屋あり大森の某納金六千圓はかり持來り洗足の間に一圓も殘らす灰とせり牛市の澤屋甚助と云は子の生れし七夜の祝とて近所の者を請待し酒宴半なりしか來客十四人はかり同席に燒亡たり此中に澤

屋常吉と云者の姉に於信とて四十三歳の婦あり常吉は以前長門國の伊佐に行て當時在住せしか姉の於信は此夕尋行しに須臾にして見失ぬ常吉は不審に思ひ十日に濱田へ來り尋ぬれは於信は右十四人の中にて甚助方にて燒失せたり其靈魂の弟常吉か伊佐に在しを慕行しならむ此外に憐れなる死を遂しもあり不思議に助命せしもあり親を慕ひ子を尋ね即死恠我人を脊負て行あれは骨骸を袖に包て歸るあり生殘るも雨降り風吹けとも身を寄る處なく餓勞れても飯を炊く鍋なく食を盛にも器なく此末如何と安き心も無き折から縣廳より大橋河原へ長屋を數處建られ病院を設け恠我人の治療をせられ即死のものには葬送料を

賜ひ貧民の男に米三合老少婦女は二合を數日宛行はれ假屋を建るには竹木縄藁を下され非常を禁め盜賊の探索を嚴重にせられたり馬關御行在の砌は金三千圓を賜る天朝の廣き厚き御惠は申も中々恐こし一は縣廳の御美政なりかし四月廿四日の時化に難破船多し六月那賀郡大區役所を置れ長野政和これを支配す六年二月十四日石川英吉三十郎政五郎三次郎國松都合五人牢を脱け縣内に入り權大属佐々布利雄を始め等外門永喜時左官惠助に重疵を負せ高橋八郎に薄手を負す深手三人は殞命す十九日英吉以下斬罪内一人逃走る後に益田にて捕て斬らる八月二十四日の洪水に管内の損害田方七百八十三町八反四畝十七歩畑

方三百四十三町二反七畝十歩流家百九十七軒潰家三百七十八軒半潰四百八十七軒郷藏四軒土藏十三軒同半潰一軒同流失二軒納屋流失百五十一軒同潰二百九十一軒半潰九十三軒炭木屋六軒炭五万五千貫堤防二千五百十三所橋梁八百二十三所道路三千百八十七所水除六千六百五十八所井堰三千百三十七所用水路二千四百七十九所溜井百八十二所樋類十九所山岸崩七千四百十四所死亡四十五人牛馬死亡十六疋同惟我一疋と屆出る九月十二日大潮あり瀬戸島海士屋の内庭まて潮上ると云ふ七年三月五大區を置れ八年第一大區役所落し長野政和支配す今の公同館これなり此間佐々布温これに代る九年四月廿六日

濱田縣を廢し島根縣に合せ濱田縣令佐藤信寛を島根縣令とせられ五月に濱田支廳を置れたれと間なく廢し區役所を元縣廳へ移されたり濱田は八町を本とし兩浦瀨戸島を合し家數九百五十六軒青より三重まて東西十一町四十一間二尺南北二町なり去る慶應二年の變動を始とし明治九年の廢縣まて十一年間災害打續き家中屋敷其外多く減し賤民の活計市中の困難この時と云へし茲に第一大區役所を改て那賀那役所とし佐々布温・故の如し明治十七年三月赤間赴城を那長に補る次に二十三年八月井關百合藏これ代り次に二十九年八月矢野澁これに代り次に三十年一月橋本求を補る此間大に開明し道路の改修諸會社の新

設其他漸次に進歩し田町牛市等を濱田町に編入し三十年十二月現在は戸數二千百五十一戸人口九千八百二十九人内男四千八百二人女四千二百廿七人の多に至れり町數も増加し名稱も此とき多く改められたり開港も許可せられ市中の繁忙なる驚に堪たり殊に三十一年七月廿四日五師團第廿一聯隊轉營あり將來の繁昌屈指して待へし以上逐一記載せと雖も方今日進の際にて日々變更し昨日の淵は今日の瀨と後來大に体面を變へし希くは有志たち漸次に記繼て後の今日を視ること今日の昔日を視る如くなら令さる事を乞祈つゝ筆を茲に止む

濱田鑑跋

石華仙は那賀郡鍋石の產なり氏は藤井名は宗雄と云ふ世々庄屋たり明治七年四月三宮石神両社の祠官に任せられ尋て濱田縣に出仕し地誌國史の編輯掛たり教導職を兼ね頻に昇進して遂に大教正に至れり國學を嗜み和歌を好み地誌學に精し曾て本國の事跡を編述せらる其書十數部殆んと櫃に餘る此編その餘材なり城山を始め市街村落山岳嶋嶼

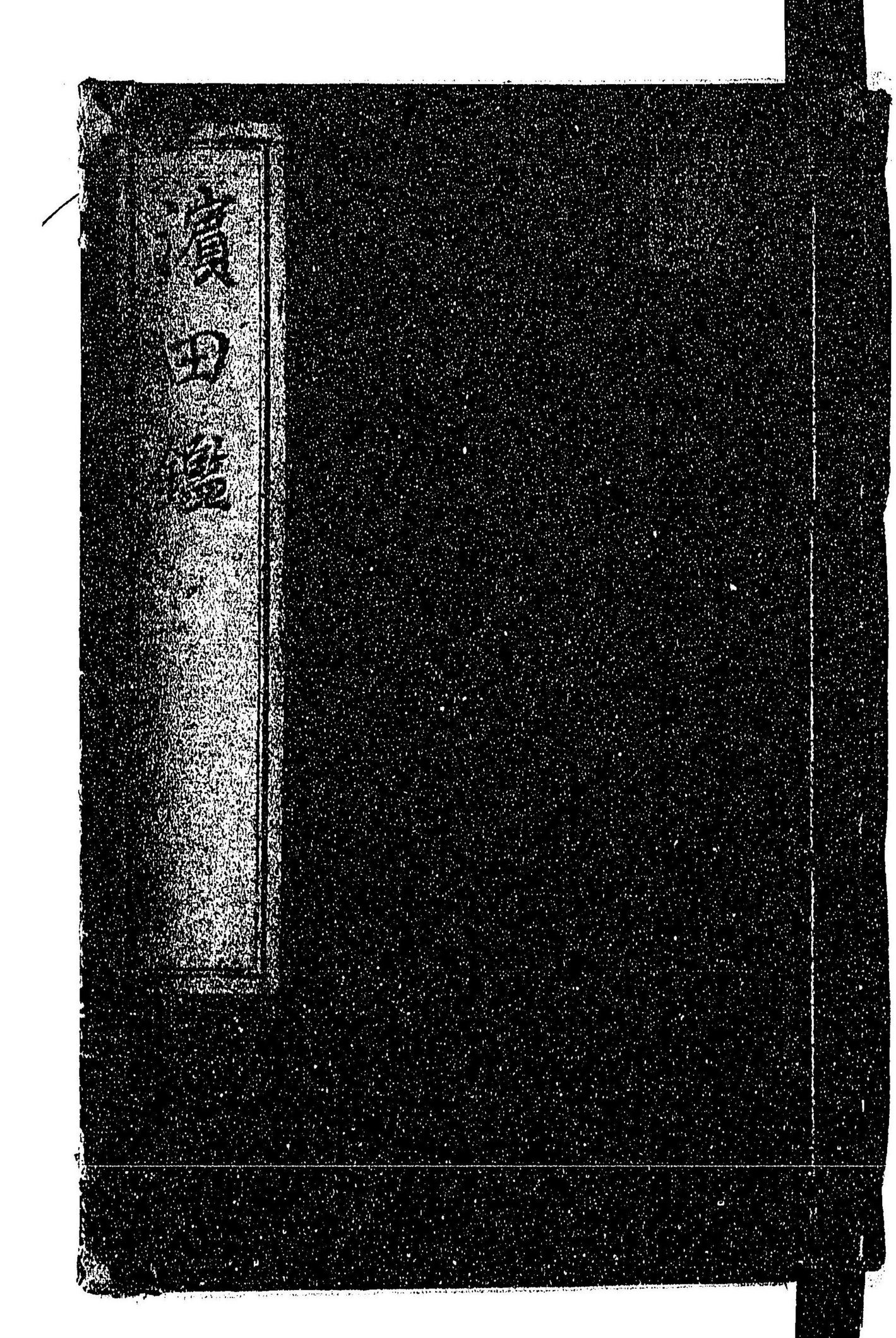
載て漏さず神社佛閣官衙會社記て遺さず故事舊說を採り街談巷話を挿み覽者をして倦さらしむ嗟呼至れるかな翁七旬を超へ此作あり其の功勞少とせず實に濱田の寶鑑なり如何そ是を不稱むや如何そ是を不賛むや故れ掌舉て歌て曰く萬代も濱田の町の明らかに見ゆる鏡のなれる嬉しさ于時明治三十一年九月石津平造謹識

明治三十一年十一月廿五日印刷
明治三十二年十二月五日發行

著作者　石見濱田町　藤井宗雄
發行者　仝　仝町大字原井　安達惣市
發賣所　仝　上　安達共榮堂
印刷者　大阪市南區鍛谷東ノ町百七十五番屋敷　前田菊松
製本所　大阪市東區博勞町四丁目　岡田藤三郎

安達共榮堂藏版

187
81



025943-000-7

187-81

浜田鑑

藤井　宗雄／編

M32

ADC-3517